

氏 名 金 跳咏

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1977 号

学位授与の日付 平成 30 年 3 月 23 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻  
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 三国・古墳時代の金工品をめぐる日韓交渉に関する考古学的研究

論文審査委員 主 査 准教授 上野 祥史  
准教授 高田 貫太  
教授 仁藤 敦史  
教授 権 五栄 ソウル大学校  
人文大学国史学科  
教授 早乙女 雅博 東京大学 大学院  
人文社会系研究科  
教授 高久 健二 専修大学 文学部

論文の要旨

Summary (Abstract) of doctoral thesis contents

本論文は、東アジアの古墳から出土する金工品の考古学的分析を通して、日本列島の古墳時代における日韓交渉の動態を明らかにすることを目的とする。

まず、序章において、従来の日韓関係史研究が、朝鮮半島から出土したモノと日本列島から出土したモノを安易に線で結んだ地域間交渉論に陥っている状況を指摘した。それを克服するためには、日韓交渉を示すモノ資料を多角的に分析する必要性があり、その対象として金工品が有用であることを述べた。すなわち当時の金工品の製作には、希少な素材、高度な金工技術（を有する工人）、工人を管理する工房組織の存在が不可欠であった。それゆえに金工技術を駆使した装身具は、その着用者の社会的地位を表象する器物として機能を想定でき、さらにその授受関係、製作工人の動向を把握することで、当時の日韓交渉の動態を細やかに把握できる。

次に第1章では、帯金具に関する研究史を検討し、かつ具体的な事例を取りあげて、古代東アジアにおける帯金具が、着用者の政治経済的な身分を表象する属人的な性格とともに、王権との直接的な関係を表象する社会的な性格を有していたことを明らかにした。帯金具は、王権を表象する服飾品を構成する金工品であり、その製作、所有は政治的な色彩が濃厚な行為であった。

第2章では、東アジアの帯金具資料を網羅的に集成し、その型式学的検討を通じて分類案を提示し、その時期的な変遷を整理した。まず、先行研究における分類が銚板の文様のみ注目していた点や限定した地域に適用可能な分類にとどまっていた点を問題点として指摘した。次に、東アジア全域に適用が可能なように、帯金具の構成部品（鉸具、垂下飾、銚板、帯金具）のセット関係を重視した分類案を提示した。そして、この分類案に基づいて、当時の東アジアに割拠した政治体の圏域（三燕、高句麗、新羅、百濟、加耶、倭）ごとに属性分析を行い、具体的な型式系列を設定することで、時間的な変遷を明らかにした。

第3章では、第2章における検討を基礎にして、各政治体相互の帯金具の変遷を比較検証することで、古代東アジアの帯金具についてⅠ～Ⅳ段階という段階を設定した。次に段階設定に基づきながら大枠としての系譜関係を検討し、中国の西晋・東晋に系譜を求められる「複合文系統」、高句麗・新羅系の「草葉文系統」や「逆心葉形系統」、高句麗・新羅や百濟に系統を求められる「龍文系統」、そして百濟系の「鬼面文系統」の5つの群を設定し、それらが、政治体の圏域をまたいで広く分布する様相を明らかにした。さらに、各段階の絶対年代について、紀年名資料、歴史的事件、古墳の年代観を参考にしつつ、Ⅰ段階（4世紀）、Ⅱ段階（5世紀前葉～中葉）、Ⅲ段階（5世紀後葉～6世紀前葉）、Ⅳ段階（6世紀中葉以降）と定め広域編年案とした。

第4章では、この広域編年案と系譜関係に基づいて、各政治体における帯金具の展開と歴史的な特質を検討した。三燕や高句麗の場合、中国両晋の帯金具を積極的に受容しつつも独自の帯金具を創出する動きが顕著であり、それだけ政治体としてのアイデンティティの表象として帯金具が機能していた。また、百濟においては在地的な馬形帯鉤に加えて両晋系の「複合文系統」の帯金具を受容する中で、政治的な序列を定める動きが看取できる。そして新羅の場合は、むしろ三燕・高句麗との交渉関係の中で独自の帯金具を創

(別紙様式 2)  
(Separate Form 2)

出し、服飾品として洛東江以東の諸地域に盛んに分配することで、社会統合の表象としていた。それに対し、加耶や倭においては、独自の帯金具の創出の動きはあまり目立たず、政治的序列や社会統合の表象としての機能よりもむしろ、外来の帯金具を「所有」し「見せびらかす」ことで、王権や他の政治体とのつながりを誇示するための器物であった。

第5章以降では、帯金具をめぐる地域間交渉が、実際に「人」の移動や往来によるものなのか、もしくは「モノ」の授受によるものなのかという問題について、帯金具の製作技術の分析を通して検討した。特に多様な帯金具がもたらされた倭に焦点を定めた。

第5章では、これまで考古学における技術論の展開を研究史的に整理するなかで、本論文における分析視点を明確にした。

第6章では、龍文系統の帯金具の中の「Ⅲ1 龍文」帯金具（鉸具：I字形刺金・弧状の上縁、銚板：龍文を透かし彫り）について、銚板と垂下飾の製作工程、彫金技術、鋸の製作技術などの検討を行った。百済、新羅、倭に分布する「Ⅲ1 龍文」帯金具の製作環境は極めて類似しており、その形態の共通性も著しい。よって、日本列島出土の龍文系統帯金具は、朝鮮半島で製作された「モノ」が移入された可能性が高い。

第7章では、まず龍文系統の帯金具の中で、「倭Ⅲ2 龍文」帯金具（鉸具：上縁の丸みを強調、銚板：龍文を浮き彫り）の製作技術について検討し、特に銚板文様の表現に、「精密鑄造」技法が用いられていることを明らかにした。そして、この「精密鑄造」技法は、百済と加耶の金工品に多用されていること、「精密鑄造」による金工品には「円弧状なめくり」タガネという特殊な道具が共通して用いられること、それにも関わらず「倭Ⅲ2 龍文」帯金具が倭においてのみ確認できることを指摘できる。この諸点を考慮すれば、「倭Ⅲ2 龍文」帯金具は、主に百済から倭への金工技術（工人）の導入を通して、日本列島において製作された蓋然性が高い。

第8章では、まず鬼面文系統の帯金具の製作には、打ち出しと「精密鑄造」の二者が存在することを指摘した。次に「精密鑄造」による製作工程を具体的に復元し、その製作工程が、百済、加耶、倭の資料群に共通して認められることを明らかにした。そして、百済を中心に分布すること、形態的にも相互に共通性が高いことから、倭の鬼面文系統の帯金具は、基本的には朝鮮半島からの移入品であると推定した。

終章では、各章における検討成果をまとめることで、帯金具が持つ歴史的意義を明らかにし、今後の課題と展望をまとめた。Ⅰ段階では、中国両晋によって製作された「Ⅰ複合文」帯金具が東アジアに広まるとともに、高句麗や三燕ではその模倣を通して、独自の帯金具を創出し、自らの政治経済的な表象とした。Ⅱ段階には、三燕では帯金具が急速に衰退する一方で、新羅、百済、加耶、倭においても本格的に帯金具が出現する。その背景には政治体間の活発な相互交渉が存在した。特に新羅、百済では政治秩序や社会統合の表象としての機能が明確になる。Ⅲ段階になると、帯金具の社会的な重要性には、政治体ごとに差異が生じるようになる。新羅では社会統合を表象する器物としての性格が充実する。それに対し、百済はそれほど顕著ではなく、加耶においても移入品が少数確認できる程度である。一方、倭では「倭Ⅲ2 龍文」帯金具を創出し、倭王権との政治経済的な関係を表象させた。そしてⅣ段階には、帯金具自体が急速に衰退する一方で、百済と新羅に限っては帯金具の型式が一新される。その背景として新たな衣冠制の成立などを想定した。そして、本論文が保有論（第1～4章）と技術論（第5～8章）、そして両者を組み合わせて

(別紙様式 2)  
(Separate Form 2)

歴史的意義を述べた解釈論（終章）からなることを指摘した。この点が従来の金工品をめぐる日朝関係史研究を一步進めた点であると把握し、ここに本論文の特色があることを述べた。